

はじめに ..... 5

- 一 「釜ヶ崎」という地名はどうしてついたか ..... 16
- 二 一世紀前までの釜ヶ崎はまだ、のどかな田園地帯であった ..... 44
- 三 日露戦争の前の年いわゆる釜ヶ崎が誕生した ..... 61
- 四 昭和初期の釜ヶ崎は貧困と疫病に支配された町だった ..... 83
- 五 次々と起こった騒動で釜ヶ崎内はどう変化したか ..... 109
- 六 釜ヶ崎の町名は変わったが住民の生活はどれほど変わったか ..... 149
- 七 人間性回復のためのあいりん対策こそ急務 ..... 171

八 わが愛する町・釜ヶ崎への提言 ..... 191

- 1 あいりん地区を自由で、明るい労働者街とするために ..... 191
- 2 愛隣イメージからの脱却こそ先決 ..... 192
- 3 釜ヶ崎の中心部に歩行者天国をつくらう ..... 197
- 4 釜ヶ崎の「住」の問題はどう解決すべきか ..... 206
- 5 医師、看護婦、ケースワーカーをふやして医療体制の充実を ..... 210
- 6 日雇労働者の「職」の安定策はいかに推進していくべきか ..... 214
- 7 住民の声を生かしてあいりん対策の充実を！ ..... 217
- 8 結びにかえて ..... 222

あとがき ..... 232

地 図 ..... 236

## はじめに

ドイツに古くから「森の下にはもう一つの森がある」ということわざがある。それは森の下に無数のかびとか、バクテリアとかがいて、地上の森を支え、そして樹や草を茂らせているという意味だそうである。何のへんてつもないこのドイツのことわざが、釜ヶ崎という地域に対して果たして何を教えているのだろうか。

そういえば釜ヶ崎は十年ほど前から、あいりん地区といって労働、民生福祉の両面から、かなりの改革がすすめられているが、今日でもなお、根強くスラム的要素が残存している。そして、面積はわずか〇・六二平方キロという狭隘な町ではあるが、なんと一都市に匹敵する四万五〇〇〇人という膨大な数の人口が居住している。一口に〇・六二平方キロに対して四万五〇〇〇人といても実感として捉えにくいかもしれないが、それは面積にして畳二枚に一人の割で住んでい

るのであって、それは道路を歩いていても、だれかと、どこかで何かがすれ合うといった超過密状態である。そして、手配師と呼ぶ日雇労働の斡旋業者が三〇〇〇人近くもいて、公然と労働者の賃金をピンハネしているし、また、彼らがいなくては約二万人いるといわれている労働者のうち、一万人ほどの労働者はその日の仕事につけないという現状にある。ここに、釜ヶ崎における最も深刻な問題が秘められているわけだ。

さらに、結核や精神病の患者は数え切れないほどいるし、行路病者は年間、一五〇〇人以上もいるといわれているが、医療体制は本論でも説明しているように、必ずしも整備されているとはいえない。いや、救急体制はむしろ危機に瀕しているといった方が正しかろう。売春、トバク、暴力、強盗殺人といった住民や日雇労働者を脅かす反社会的行為はもちろん跡を絶たず、臭気とゴミは町全体をおおい、巨大都市・大阪のなかのジャングルとして、今日でもなお肥大し続けながら生息している。

ところで、この釜ヶ崎は決して短期間にジャングルとして成立したものではない。スラム化してすでに七十余年の歴史を数えているし、なお、その母体となった細民街「長町（名護町）」は、三〇〇年以上の昔の徳川時代初期において誕生しているのである。だから、封建社会が無宿人や日雇人足を集めて細民街を生み、資本主義がそれをスラムとして育成し、膨張させていったとい

うことができる。しかし、釜ヶ崎、長町の場合は、隣接地にある日本最古の寺院、四天王寺の存在と、なんらかの関係を持ちながら発展しており、地域全体が貧しい人を集結しやすい環境になっていることは明らかである。こう見ていくと、このジャングルの下にあるもう一つのジャングルとは、果たしてなんだろうかということになる。私は歴史的な背景もさることながら、基本的にはやはりメンタルなものだと思っている。そのメンタルなものとは、釜ヶ崎に流れてくるまでに資本によって搾取され、生活に疲れて生まれたものであり、加えてここでの孤独で、味けないドヤ生活が、また身分保障のない低賃金の日雇労働が、より心をすさませているといつてよからう。その他、目にうつるのは若い日々を失って失意のまま暮らしている人、酒を口にするに一転して地獄と化すという落差の激しい人、酒に飲まれて道路上で大の字になって寝ている人であり、メンタル・ヘルスの回復には環境改善より困難が予想される場合もある。

さて、私が最初に釜ヶ崎に足を踏み入れたのは、学生時代であるが、ボランティアとしては、昭和四十四年（一九六九年）五月、万国博覧会が開催される前の年、畏友・金井愛明牧師が国鉄環状線・新今宮駅近くの三畳の小部屋を借り、キリスト教の伝道をはじめるといっているので、釜ヶ崎にはそれほど興味も、関心も抱いていなかったが、友情に引かれて連なってきたのであった。しかも、その三畳の小部屋は通風、採光は全くなく、黒く汚れた板壁一枚で隣室と仕切っており、共

同便所、共同炊事という構造で、典型的なスラム住宅であった。だが、ここにきてもっと驚いたことは、この三畳の小部屋に一家四、五人が折り重なるようにして、寝泊まりしていたことである。また、近くの愛隣総合センター付近では、手配師がいつも車を停めて通行人に「働きに行かんか」と呼びかけており、なんとなく薄気味悪い雰囲気をかもし出していたので、これは大変なところへきたもんだと思っていたのである。

昭和四十五年（一九七〇年）九月、なんとか資金の都合がついたので、ボランティア活動の拠点を西成警察署に近い長屋の一軒屋に移し、聖書研究会、無料診療、子供たちのための無料学習教室などを、不十分ながら軌道に乗せることができた。このころから私にも釜ヶ崎のよさと悪さ、喜びと悲しみが肌で理解することができるようになり、より熱心な伝道活動を通じて住民のメンタル・ヘルスの回復をはかろうと考えたのである。しかし、古くから「釜ヶ崎は政治と宗教の不毛の地」といわれているように、一年たっても、二年たっても伝道は遅々としてすすまなかった。現在でももちろんそのとおりである。それは住民に信仰に入るほどの余裕も、ゆとりもない結果であることがわかったし、それに伴って私たちの仕事の一つも、住民の声なき声を汲み上げて、それを世論としていくことだと把握しはじめてきたのである。

こうして昭和四十七年（一九七二年）五月、私は「わが愛する町・釜ヶ崎への提言」という釜

ヶ崎改革私案を小冊子にまとめて発表し、黒田大阪府知事、大島大阪市長らに贈った。これは住民のニーズ（要望）、ウォンツ（欲求）、ホープス（希望）を、住民との会話のなかから汲み取って、それをベースとして構成したものである。しかし、それは釜ヶ崎の歴史、地形、現状といったものに精通していない人には、一読していただいても、十分に理解できるものではなかった。そこで、この著書では最終の章に私が昭和四十七年五月に発表した「わが愛する町・釜ヶ崎への提言」の改訂案を改めて掲載した。そして、この住民の声ともいえる改革私案をより深く理解し、認識していただくために、元西成労働福祉センターの職業紹介部長・郡昇作氏の著書『日本の玄関・釜ヶ崎』と『釜ヶ崎無宿』のほか、旧今宮町が大阪市に吸収されて西成区となったときに出版された『今宮町志』、大阪市編纂の『西成区史』、各社新聞記事なども参考にして、『地図にない町の歴史——わが愛する釜ヶ崎』と題してまとめたのである。

さらに、昭和四十八年（一九七三年）十一月一日から大阪市の一部の町名が変更され、大正六年（一九一七年）四月一日、大阪市西成郡今宮村が「今宮町」に昇格したとき、釜ヶ崎という地名に代わって付けられた東入船町や西入船町、その他、海道町、曳船町、今船町といった、海に深いつながりのある町名は消えうせてしまった。しかし、町名が変更されたからといってそのまま放置しておく、スラムとして最も肥大していった時期における、あの懐かしい町名は忘れ去

心細い人生のある冬の明け方  
 繁忙な商店街の  
 雨に濡れた舗道を  
 私は唯一人 歩いてきた  
 静かに コツコツと

無題

なお前進し続ける労働者群がいることに着目して、その男性的な方向感覚と、現在の管理社会にはない、ある意味で釜ヶ崎だけにある自由を、新しい町づくりのコンセプトとしてまとめている。そして今後、指向していくべき方向を「自由で、明るい労働者の町」としているのである。

しかし、釜ヶ崎における労働者の現実の生活は、果たしてどうだろうか。親や子などの肉親とも離別し、社会に対してもある種の負い目を持っていながら、何らの保障もないきびしい環境のなかでさびしく生きている人が多いとあってよからう。それは本文で語りつくしているので、ある日雇労働者が作った一編の詩を紹介することによって、それに代えることとする。

あいりん地区内の新旧地名

旧地名	新地名
山王町 1丁目, 2丁目	山王町 1丁目
山王町 3丁目	山王町 2丁目
山王町 4丁目	山王町 3丁目
東田町	太子 1丁目
今池町	太子 2丁目
東入船町, 西入船町, 甲岸町一部	萩之茶屋 1丁目
甲岸町一部, 海道町一部	萩之茶屋 2丁目
海道町一部, 東萩町	萩之茶屋 3丁目
東四条 3丁目, 2丁目	花園北 1丁目
東四条 1丁目,	花園北 2丁目

昭和48年11月1日より変更

られてしまう。そのこともあって、今度の出版を思い立ったわけである。だが、もっと基本的なことは、釜ヶ崎という日本最大のスラムがどうして成立していったか、現実はどうか、さらには今後この町はいかにあるべきかなどを、みなさまにも正しく理解していただき、認識していただくために研究し、発表したものである。

また、「わが愛する町・釜ヶ崎への提言」と題する改革私案は、太陽のない町、暗黒の町、慟哭の町といわれながらも、たくましく生き続けている労働者、倒れても傷ついても

私は 私の

靴の音を調べながら歩いた

いつの間にかまたまた

涙が溢れた

雑踏と喧騒と臭気に

明け暮れていく商店街

ふと私は涙を拭いた

そこには今日も必らず

家庭のために 娯楽のために

生きている人間の場所の

すさまじい姿があった

私たちの人生を顧みるとき、油断していて一歩でも誤った方向に踏みはずすと、そこには雑踏

と喧騒と臭気に明け暮れる町が、ポツカリと大きな口を開いて待ちうけている。また、最近のわが国の都市集中政策には、農山漁村の貧しく弱い人たちを、釜ヶ崎や山谷という「どん底の町」へ追いやる危険性を、多分に内包している。事実、これまでなら失業していても、なんとか食うことだけはできていた農山漁村の住民が、産業界で技術革新がすすみはじめた六〇年以降、そこでは食うことさえも許されなくなったということである。この結果、農山漁村は産業界予備軍のたまり場でなくなつて、そこにいた潜在的な失業者群は、釜ヶ崎や山谷へ転落してこざるを得ないこととなつて、さらに苦しい生活を強いられることとなつていく。

さらに、いま着実に形成されつつある管理社会にも、このような落とし穴があることは、現実の釜ヶ崎や山谷が明確に立証している。私が知っているだけでも、オートメーション操作にあきた若者が多数、流れてきている。これらは貧しさよりも一種の厭世気分から、産業界を脱出してきたものであり、企業の人間性を無視した能率第一主義が転落させていることも無視できないのである。このことは釜ヶ崎や山谷という町が、いま日々、平和な生活を送っている人たちにとつても、決して無関係でないことを教えている。

また、最近では釜ヶ崎を核としてそれを取りまく周辺の町に、地方から出てきた、経済的に不安定な住民が群をなして居住している。そのなかには日雇労働者、屋台手伝い、組関係などの人

のほかに、かなりの数の売春婦がいることも明らかにしている。さらに、釜ヶ崎から少し離れた大正区小林町のあたりでは、沖繩出身の人たちが共同炊事、共同便所のブラック建てに住み、スラム化が進展している。キャバレーやバーなどで働く女性などは、こういった南大阪一帯の都市底辺に住みついて、家庭的にも不安定な状態のなかで、かろうじて最低生活を維持している。こうした現象はわが国の資本中心の産業政策から生まれたことに間違いはないが、各都道府県において当然、保護しておかねばならなかった人たちを、そのまま放置していたから、釜ヶ崎や山谷という町に転落してきたのであり、地方の福祉行政にも重大な過失があったといわざるを得ないのである。こうして国政、地方行政の手落ちの受け皿として、南大阪の一角に釜ヶ崎という町があるのであって、現在いろいろな角度から改革がすすめられているが、町全体が大阪市平均の約五倍という過密状態で、人心はすさみ、臭気はちまたにあふれ、すでに手当の施しようもないほど重い病気がかかっている。

さて、この著書では釜ヶ崎の歴史を描いているのだが、当然のことながら釜ヶ崎がスラム化していったこの七十余年間で、「どん底の町」としてあえていっている現在を紹介することに重点をおいている。スラム化する以前の歴史についても簡単にふれているが、それは「釜ヶ崎」という地名の由来を語るために、史実と違う箇所があるかもしれないが、あえて大胆に書き記しておいた。

また、この著書は釜ヶ崎で奉仕していた先輩たちが、書き残していた限定本や資料（今宮町志、西成区史ほか）にもとづいて完成した部分が多く、「わが愛する町・釜ヶ崎への提言」と題したあいりん地区改革私案も、住民の声や意見を私がまとめて代弁したにすぎないと思っている。このような理由もあって、本書から得る収益はすべて、釜ヶ崎におけるキリスト教の社会事業に役立てたいと思っている。

さらに、本書は昭和八年（一九三三年）、すなわち昭和初期の金融恐慌の結果、戦前では釜ヶ崎に最も多くの人々が転落してきた年に、フランスからきて西成警察署裏（現在、海道公園となっているところ）で、聖心セツルメントを設けて医療や保育事業で、貧しい人たちに奉仕していたカトリック愛徳姉妹会の Каттан修道女に、感謝の意を込めて贈りたい。彼女は最も深く釜ヶ崎を愛した人の一人で、太平洋戦争中も母国・フランスに帰ることなく、釜ヶ崎がB29の爆撃によって丸焼けになる少し前まで、ここにとどまって奉仕していたのである。現在はすでに老いて、宝塚市小林にある同修道会が運営するばらホーム保育所で余生を送っている。また同じころ、大阪市職員として釜ヶ崎の福祉施設に勤務し、住民に誠心をもって奉仕し「釜ヶ崎の父」といって親しまれていた郡昇作氏には、昔の釜ヶ崎についてずいぶんと教えていただいた。ここに改めて深く感謝の意を表しておく。